

ショーペンハウアーとシェリングにおける

観念論と自然哲学の対置

酒井 剛

一

ショーペンハウアー哲学に観念論と自然哲学の二重の系列があることは、すでに何人かの研究者によって指摘されている¹⁾。しかしこの二重系列の思想内容の詳細については、ショーペンハウアー研究において未だ不明瞭な部分が多い。これに対して本論文は以下のことを明らかにすることを意図している。すなわちショーペンハウアーにおける観念論と自然哲学の対置にはシェリングにおける超越論哲学（観念論）と自然哲学の対置と共通した多くの問題意識、また類似の発想を認めることができ、したがって前者の対置思想は後者のそれを受け継いだものではないかと推定されるのである。ショーペンハウアーがこの対置思想を論じる際にシェリングに直接言及することは一度もないため、従来の研究においては両者の関係は見落とされてきたが、本論文は両者の対置思想の親近性を指摘することによりショーペンハウアーが同思想をシェリングから受け継いだ可能性を示唆し、ショーペンハウアーにおける観念論と

自然哲学の対置に新たな照射を与えたい(2)。

一一

周知の通り、シェリング自然哲学はフィヒテ自我哲学への批判から出発した。シェリングは自然を含めた一切のものを自我のうちに接収しようとするフィヒテに反発し、むしろ自然の自律性・産出性を主張し、超越論哲学に自然哲学を対置させた。超越論哲学は「第一のもの、絶対的なものとしての主観的なものから出発し、そこから客観的なものを成立させる」(SA I/2, 342)。これに対して自然哲学は逆に「客観的なものを第一のものとし、この客観的なものと一致する主観的なものがいかに客観的なものに付け加わるのかを問う」(SA I/2, 340)。シェリングの自然哲学の立場においては、フィヒテが一切のものの基底であると主張した自我は第一のものではなく、むしろこの自我をも自然の根源的産出力から導出することが目指される。シェリングはこのようにして、超越論哲学における主観的なものから客観的なもの、自然哲学における客観的なものから主観的なものへの円環を完成させ、最終的に精神と自然を綜合するという壮大な思想を構想することになる。

以上のシェリングと同様にショーペンハウアーも、哲学が観念論だけで終わってしまったとは不十分であると考えて以下のように述べている。

人が主観的なものから出発するなら、……主観的なものの直接性のためにこの方法は最大の優位を持っている。とはいえ哲学に

において導出されたもの〔客観的なもの〕を……もう一度出発点とし、したがって反対の立場から、つまり客観的なものから主観的なものを導出することによって哲学を補充しないなら、人はある部分非常に一面的であり、ある部分完全に正しいとは言えない哲学を手にするだけだろう……。 (SW VI, 35-6)

ショーペンハウアーは主観的なものから客観的なものを導出する観念論に対して、逆に客観的なものから主観的なものを成立させる自然哲学を対置し、前者を後者によって補充しようとする (SW IV, I/73)。その際、観念論に自然哲学が対置されなければならない理由をショーペンハウアー自身は明確に述べてはいないが、いくつかの断片的な記述からその理由は以下のようなものだと考えられる。

まず第一に、ショーペンハウアーが生きた一九世紀はまさに自然科学の台頭が著しかった時代であり、彼は自らの観念論哲学と自然科学の提携を積極的に推し進めていこうとする (SW II, I/14)。このため哲学は観念論的立場だけではなく、自然科学の实在論的立場からも世界の構造を明らかにし、両立場がいかなる関係にあるのかを示さなければならぬ。そして客観的・实在論的立場から世界の構造の解明を行うのが自然哲学である。

第二に、ショーペンハウアーの観念論的立場においては「世界は私の表象である」 (SW II, 3)。したがってこの立場においては自然もまた意識内の表象として、人間的自我による構成物として説明されることになる。しかし人間は同時に自然のうちに帰属し、自然の懐に抱かれた存在でもあり (SW II, 36)、人間の活動はこの自然の中で常に制約されている。しかし観念論は、人間のこの自然への帰属性および自然の側からの人間への制約を十分に説明することができない。

第三に、ショーペンハウアーによれば自我の成立をその根底において基礎づけているものは「意志」である (SW

Ⅲ、153)。この意志は知性を欠いた「盲目的衝動」であり、意識に先行する自然である。意識内に立つ観念論は、意識に先行するこの意志の活動を叙述することができない。

おそらく以上の理由から、ショーペンハウアーは観念論に自然哲学を対置させたのだと推定される。彼の主張には、人間の自然への帰属性を強調し、自我に先行するその成立根拠を自然のうちに求めていったシェリングと類似の問題意識を認めることができる。

しかし他方で、ショーペンハウアーとシェリングの思想には決定的な違いがあることも指摘しておかなければならない。すなわちシェリングは超越論哲学に自然哲学を対置する際、両者の同時並置的な平行性を主張した（あるいは後には超越論哲学に対する自然哲学の優位が説かれる）。彼は以下のように言う。「説明が〔超越論哲学と自然哲学のうち〕どちらから出発するか、何を第一のものとし、何を第二のものとするかは全く未規定のままにしておいていい。……どちらの点から出発しても、操作の結果は同じものにならなければならない」(SA II, 32)。しかしショーペンハウアーにおいてはこのようなことは認められない。すでに述べた通り、彼の自然哲学は客観的・實在論的立場からの世界の構造の解明である。しかし客観的世界の存在を無批判に前提すれば、その思考は直ちに独断論に陥る。カントの正統な後継者を自認するショーペンハウアーにとって、自らの思想が独断論になることは何としても避けなければならないことだった。しかしそれでは、独断論に陥ることなく自然哲学を展開することはそもそもどのようなすれば可能なのか。

ショーペンハウアーがとつた手順は以下のようなものだと推定される。すなわち彼においては、哲学が自然哲学から出発することは否定される。そうではなく、哲学はあくまでも観念論に端緒を置かなければならない。事実ショーペンハウアーの名著『意志と表象としての世界』の中では、観念論的叙述（表象としての世界）の考察が自然哲

学的叙述（意志としての世界」の考察）の前に置かれている。彼は主著第一巻で、まず観念論的立場から表象界（観念論的世界）の構造を明らかにする。次いで第二巻で、この表象界の構造と対応させながら意志界（實在論的世界）の構造を類推的に導き出し、自然哲学を展開していく。つまり實在論的世界の叙述（自然哲学）は、あくまでも先行する観念論的世界の叙述との類比（類推）が成り立つ限りにおいて妥当性を持つのである。このような叙述方法により、ショーペンハウアーは自らの自然哲学が独断論に陥ることを回避しようとしたのだと思われる。『意志と表象としての世界』の構成に関してはニーチェ以来多くの者達が、「ショーペンハウアーは表象としての世界という回り道をすべきではなかった。まず意志としての世界から書き始めるべきだった」と批判してきた³⁾。しかし同書の構成は、実際は必然性を持ったものであることを強調しておかなければならない。

三

まずショーペンハウアーの主著第一巻において観念論的立場から明らかにされた世界の構造を確認しておきたい。彼の観念論においては、意識の外の対象自体（物自体）を想定することなく、どこまでも意識内在的立場から表象経験の構造を説明することが目指される。ショーペンハウアーは表象経験の構造を以下の二側面から説明している。すなわちまず第一に、私があるものを表象する際、私は常にただ一つの対象だけを直接知覚している（SW V II, 23）。第二に、このただ一つの対象は「全体表象（Gesamtvorstellung）」のうちに組み込まれている（SW V II, 22-3）。このうちの第一の側面（「ただ一つの対象だけを直接知覚している」）は以下のようなことを意味している。例えば私

の眼の前にA、B、Cという三つの対象があり、私がこのうちのAへと注意を向けたとしよう。するとその場合、私
が直接主題的に知覚しているものはAだけとなり、これ以外のBとCは私の注意から逃れ落ちてAの背後へと退く。
次に私がBに注意を向けると、今度は直接知覚されているものはBだけとなり、これ以外のAとCがBの背後に退
く。このように、私がある都度一つの対象へと注意を向け、ただそれだけを直接知覚していること(SW V II, 23)
これが我々の表象経験を構成する第一の側面である。

しかしその都度知覚できる対象は一つだけであるといつても、これ以外の対象は決して私の意識から消失してしま
うわけではない。例えば私の眼の前の机の上に一冊の本が置いてあり、私がこの本へと注意を向けたとするなら、そ
の場合私が直接知覚しているものは本だけとなる。しかし私は本を知覚すると同時に、この本が机によって支えられ
ていることを、さらにこの机もまた部屋の床によつて支えられていることを潜在的に思い描いている。つまり私は直
接知覚している対象だけでなく、それと同時に背後へと退いた諸対象の存在も予描しているのである。ショーペンハ
ウアーは、背後へと退いた諸対象のこの全体的な布置関係の表象のことを全体表象と呼んでいる。彼によれば、この
全体表象は「作用性(Wirlichkeit, Wirkanket)」の連関という構造を持つている(SW II, 10; III, 347)。上の例で
言うなら、眼の前の本は机へと作用し、机は部屋の床へと作用し、さらに部屋の床は建物の土台へと作用する。表象
界において一切の實在的客観はこのように相互に作用し合う関係のうちにあり、こうした作用性が諸対象の存在性格
を表している。私は直接知覚している対象の背景として全体的な作用連関(全体表象)を構成し、その対象をこの作
用連関のコンテキストの中で理解するのである。

ショーペンハウアーによればこの作用性の連関には以下の三種類のものがある。(1)狭義の原因—結果の連関、(2)刺
激—反応の連関、(3)動機—行為(行動)の連関。最初の原因—結果の連関は、無機物において成り立っている作用性

である。ショーペンハウアーによれば、無機物においては「原因と呼ばれる先行する状態が結果と呼ばれる後続する状態と等しい変化をこうむる」(SW I V, II/29)。つまり無機物の作用性においては、作用と反作用が相互に等しい(SW I V, II/28)。第二の刺激—反応の連関は、植物において成り立っている作用性である。ショーペンハウアーによれば植物にはある程度の自発性を認めることができ、ここでは作用と反作用はもはや等しくなくなっている(SW I V, II/30)。ただし植物における刺激—反応の連関は、オジギソウやハエジゴク等の運動に見られるように、ある原因が与えられればその結果が自動的に引き起こされるものである。最後の動機—行為の連関は、動物および人間における作用性である。動物・人間は植物のように一箇所に固定されおらず移動可能であり、受動的に作用を待ち受けるだけでなく積極的に外部へと働きかけていく(SW I V, II/31-2)。また動物・人間は無機物や植物とは異なり、原因と結果が直接結び付いていない間接的な連関も成立させることができる(SW I V, II/32)。

ショーペンハウアーにおける表象経験は、以上に見てきた対象の直接知覚と全体表象(作用連関)の二側面から成っている。そして彼によれば、我々が通常実在的世界と呼んでいるものは実は全体表象のことに他ならない(SW V II, 223)。ただし全体表象が実在的世界であるといつても、ショーペンハウアーはこの全体表象の成立根拠を客観の側には求めない。そうではなく、全体表象の成立根拠はあくまでも主観の側にある。ショーペンハウアーによれば、全体表象の作用連関の成立を可能にするものは「根拠律(因果律)」である。彼においては根拠律とは自我に帰属するア・プリオリな認識形式のことであり、自我は対象認識を構成していく際、根拠律を直接知覚されたものへと適用し、これをその根拠に関係づける。このことにより、眼の前の対象を「結果(Wirkung, 作用の結果)」、その根拠を「原因」とする作用性の関係が成立するのであり(SW II, 10)。「根拠律に基づく以上のような自我の活動を通して全体表象(実在的世界)は構成される。こうしてショーペンハウアーの観念論的立場においては実在的世界とそこ

に含まれる諸客観は、根拠律をア・プリアリな認識として持つ主観の側から導出されることになる。

四

以上のようにして表象界の構造を示した後、ショーペンハウアーの考察は観念論から自然哲学へと移行していく。そしてその際に彼が行った議論にもまた、シェリングとの差異を指摘することができる。すなわちシェリングによれば、超越論哲学と自然哲学という哲学の二極は「無差別点 (Indifferenzpunkt)」に於いて統一される (SA I/3, 4)。この無差別点は「観念的なもの (Ideales)」と「実在的なもの (Reales)」の「絶対的同一性」であり、存在する一切のものがこの同一性へと解消される (SA I/3, 15)。そしてこの絶対的同一性を把捉する認識活動が「知的直観」であるとき、我々はこの知的直観において主観と客観の対立を逃れて絶対者 (絶対的同一性) へと至ることができる (SA II/1, 376, 428)。しかしこうしたシェリングの思想が後にフィヒテ等によって批判されたことは周知の通りであり、この点に関してはショーペンハウアーもフィヒテと同じ立場に立っていた。ショーペンハウアーにとってシェリングの以上の教説は、カントの超越論的立場を踏み外した単なる独断的思想でしかなかったのであり (SW II, 30-1)、絶対的同一性や知的直観をその認識論的前提を問わずに無批判に持ち出すことをショーペンハウアーは認めない。むしろショーペンハウアーは、観念論と自然哲学を媒介するものとして身体に注目している。

ショーペンハウアーの主著第一巻の冒頭に「世界は私の表象である」というテーゼが置かれていることはよく知られているが、ここで言われている「私」は単なる意識主観のことを意味しているのではない。そうではなく、彼にお

いては自我は自らの身体と一体となつた身体的自我であるとされる (SW II, 123-4; VI, 99)⁽¹⁰⁾。そしてこの自我は自らの身体を以下の二通りの仕方でも認識している。すなわち自我は一方では身体を意欲 (意志) として認識し、他方では表象 (身体の視覚像や触覚像等) として認識しているのである。ショーペンハウアーによればこの意欲と表象という二側面はもともと「物自体としての意志」から一極へと分離して現象してきたものであり (SW II, 179, 390) この意志に基づいて意欲と表象は私の身体において緊密に接合されている。例えば私が自らの手の運動を認識する時、同時に私は自らの意欲の活動も認識している (SW II, 119)。物自体としての意志と、この意志の上に成立する意欲と表象の合一、これがショーペンハウアーにおける身体的自我の構造である (以上の意欲・表象・意志の関係は、シェリングの「両極性 (Polarität)」概念および『自由論』における「根底 (Grund, 根拠)」・「実存」・「無底 (Ungrund)」の関係を踏まえたものだろう)。ただしショーペンハウアーによれば、意欲と表象が分離する以前の意志は意識のうち以前に前提されるものではなく、私がこの意志を直接現前的に認識することは不可能である (SW III, 221-2)。したがってこの段階では意志は、身体における意欲と表象の紐帯を可能にする制約としていわば要請されるにとどまる。

さてショーペンハウアーによると、私は自らの身体における以上の意欲と表象の一致が意識的・随意的な段階 (「私が手を動かそうと意欲すると、同時にそれが起こる」) においてだけでなく、意識以前の無意識的・不随意的な段階においても成り立っているのを認めることができる。

もしも我々が、……神経系統の中枢によって導かれた意識を伴う活動 (意識的な身体行為) の本来の原動力が……意志 (意欲) であることを知っているなら、……同様に生のプロセスを持統的に維持していく活動 (無意識的な生命維持活動等) もまた、意志 (意欲) の表出 (Aeusserung) であると考へなければならぬ。(SW IV, 1/24)

身体の無意識的・不随意的な段階においても意欲と表象の一致が成り立っている例として、ショーペンハウアーは以下のようなことを挙げている。例えば無意識的に行われる食物の消化、細胞更新、体液の分泌、血液の循環等においては、自らの生を維持しようとする意欲と身体の活動が一つになっている (SW IV, I/24f.)。また我々は意識的に意欲して瞳孔の収縮活動を引き起こすことができるが (例えばすぐ近くの対象を見ようとして視線を向ける場合)、他方で不随意的にそれが引き起こされることもある (例えば突然強い光の刺激を受けた場合等) (SW IV, I/26)。さらにショーペンハウアーは以下のように言う。「歯、喉、腸は客観化された飢えであり、生殖器は客観化された性衝動である。ものをつかむ手や素早い足は、より間接的な意志〔意欲〕の努力に対応している」 (SW II, 129)。このように身体における意欲と表象の一致は、意識的な段階においてだけでなく意識以前の無意識的・不随意的な段階においても成り立っており、私の身体において意識とこの意識の領域を逃れ行く自然とが相互に浸透し合っている。そしてこの身体を突破口として、観念論的な意識の領域から実在論的な自然の領域への移行が果たされるのである。

意識的なレ・ヴェルでの意欲と表象の一致と意識以前の段階での一致とが、精神界と自然界の第一の類比である。そしてショーペンハウアーはこの類比項にあらゆる自然現象を連結させていく。まず私の身体と他の人間や動物の身体との類比は直ちに成り立つ。私は他の人間の行為や動物の行動等に、私の身体におけるのと同じ意欲と表象の一致を認めることができる。また植物においても、例えば植物が水や光を求めてこれらの方向へと根や葉を伸ばしていく姿に私の身体との類比が成り立つ (SW IV, I/61-4)。さらにショーペンハウアーは、こうした意欲と表象の一致は無機物においても認められると主張する。もちろん無機物の意欲というと奇妙に聞こえるかもしれないが、ここで言う意欲とは剛性、不加入性、弾性、流動性、熱、磁力等の「自然力 (Naturkraft)」のことを指している。例えば結晶はその結晶作用に従って常に一定の形態において結晶化する (SW II, 157)。磁石は常に頑強に北を指し、ただ鉄のみ

を引き寄せる (SW II, 140)。水はその流動性に基つき様々な状況に応じて自らの形態を変化させる (SW II, 165) 等々。ショーペンハウアーはこのようにして、人間から動物、植物を経てさらには無機物へと類推 (類比) を進めていく。

その際ショーペンハウアーは以上の考察と関連させながら、シェリングの両極性について以下のような発言を行っている。

……自然の根本原型 (Grundtypus) を発見することがシェリング学派の自然哲学者の主要な仕事であり、確かにこれは彼らの最も称賛に値する努力であった……。彼らは特に両極性に注意を促した。両極性とは、一つの力が以下のような活動へと分離することである。すなわち二つの質的に異なり対立する、とはいえ再び統一へと努力する活動へと分離することである。……両極性は、磁力や結晶から人間に至るまでのほとんど全ての自然現象の根本原型である。(SW II, 170-1)

周知の通りシェリングは自然の基本構造は両極性であると考え、この両極性が電力の十極と一極、磁力の十極と一極、植物と動物等様々な自然現象において認められることを指摘した。同様にショーペンハウアーも、意欲と表象の一致が人間・動物から無機物に至るまでの全ての自然現象において成り立っていることを明らかにしていく。そしてすでに述べた通り彼においてこの意欲と表象の紐帯を可能にしているものは意欲であるが、意欲と表象の合致があらゆる自然現象において成り立っているということは、かの意志は自然のうちにある一切のものを貫通していることになる。あらゆる自然物のうちに意志が浸透しているというショーペンハウアーのこの思想には、シェリングの「世界霊 (Weltseele, 宇宙霊)」の影響を読み取ることができるだろう。すなわちシェリングは自然のうちに充満し、その全

体的・有機体的統一を可能にしている原理のことを世界霊と呼んだが、ショーペンハウアーは一八二五年のある草稿の中で「世界霊とは意志である」と述べている。しかしそれでは、その場合のショーペンハウアーにおける意志に基づく自然の全体的・有機体的統一はどのように説明されるのか。この点については次節で見えていくことにしたい。

五

さてショーペンハウアーによれば、自然のうちにある一切の個体は他の個体との「闘争」関係のうちにある(SW II, 172)。例えば肉食動物は草食動物を捕食し、草食動物は植物を食料とする。姫蜂は他の昆虫の幼虫に卵を生みつける。樹木に巻きつく野葡萄の蔓は、幹を締めつけ窒息させて時に樹木そのものを枯らしてしまう。さらに鉄を引きつける磁石でさえ、絶えず重力と闘争しているのである。

ショーペンハウアーはこうした個体間の闘争関係を、最低次の無機物から人間に至るまでの無機物―植物―動物―人間という段階系列のかたちで表している(SW II, 173)。そして自然のうちにある個体は、自らにおける意欲と表象の合致構造を通してこの段階系列に帰属しているのである。例えば樹上で生活するナマケモノは、その生活様式上の意欲に対応して木の枝にぶら下がるためのかぎ爪等を用意しており、このような意欲と外的形態(表象)の一致がナマケモノの身体において成り立っている。ところでナマケモノが樹上で生活するのはナマケモノが木の葉を常食にしているからであり、ナマケモノはこのようにして自分よりも低次の植物との関係のうちにある。さらにこの植物もその養分となる無機物との関係を保持している。またナマケモノが樹上で生活するのは地上の肉食獣から身を守るため

でもあり、こうしてナマケモノは自分よりも高次の肉食獣との関係のうちにもある (SW I V, 1/36)。ナマケモノは以上のようにして、自らにおける意欲と表象の合致を通して自然の段階系列に帰属している。同様のことは人間に關しても当て嵌まる。すなわち人間は自らの身体 (意欲と表象) を維持するために低次の無機物、植物、動物の全てを必要とし、これらとの関係を保持しており、したがって人間といえども自然の段階系列のうちにあることに変わりはないのである (SW II, 182-3)。

この自然の全体的な闘争關係については特に以下のことを指摘しておかなければならない。すなわちショーペンハウアーの觀念論的立場において實在的世界が全体的な作用連関 (全体表象) とされたことはすでに述べたが、自然界における全体的な闘争關係はこの作用連関と対応しており、精神界と自然界の類比はここでも認められるのである。自然のうちにある個体は自らにおける意欲と表象の合一点を中心に自己保存を行い、ここから他の個体へと働きかけ、他の個体からの作用を受ける (SW II, 689)。また既述した通りショーペンハウアーの觀念論的立場において作用性の連関は原因—結果、刺激—反応、動機—行為という三つの連関に分類されたが、これらは無機物、植物、動物という自然の段階系列のそれぞれの階層に対応している⁽⁷⁾。ただし、彼の觀念論的立場において全体的作用連関の成立根拠は自我に求められたが、これに対して自然哲学においては自然の全体的闘争關係 (段階系列) の成立根拠は一切の現象を貫通する意志であるとされている。すなわち意志は一方ではそれぞれの個体における意欲と表象の合致を成立させ、他方でこの意欲と表象の一致を通して自然の段階系列を形成しているのである。自然哲学においては人間的自我は、あくまでもこの自然の段階系列の一階層にとどまる。

さて、ショーペンハウアーによれば意志に基づくこの自然の段階系列は靜的・固定的な秩序ではなく、むしろ動的・産出的な秩序である。そもそも意志は、自然の段階系列を維持するためにそれぞれの種族において絶えずおびた

だしい数の個体を生み出し続けなければならない (SW II, 325)。また意志は、段階系列の低次の段階からより高次の段階において「客観化 (Objektivaton)」しようとする努力し、他の個体との対立を克服しながら自然の階梯を一段づつ上へと発展していく。

……一なる意志は可能な限り最高の客観化を目指して努力し、意志の現象の低次の段階における争いの後にこの低次の段階を廃棄する……。闘争なしにはいかなる勝利もない。……高次の意志の客観化は、ただ低次の意志の客観化を打ち負かすことによつてのみ生じる……。 (SW II, 173)。

意志は段階系列の最低次において、まず重力や磁力といった自然力として現象する。この段階での意志は、その活動にいかなる目標も限界も認められない盲目的な作用である。しかし無機物は他の無機物と闘争し、最終的に植物に敗れてその養分となり、これにより意志は次に植物の段階へと発展する。この植物の段階における意志は、単なる盲目的作用ではなくある程度の自発性を持つことになる (SW IV, 1/60-1)。しかし植物の活動は未だ認識を介さない自動的な運動であり (SW II, 138)、ここでは意志は知性を欠いた意欲として現象する。さらに植物は動物に敗れてその食料となり、意志は動物において現象する。この動物の段階において初めて認識が生じる (SW II, 245)。ただしショーペンハウアーによれば動物は反省の能力である理性を持たず、この点において動物の認識は未だ不完全なものにとどまる (SW II, 434)。最後に意志は人間の段階へと到達する。人間は動物が欠いていた理性を具えており、この理性が人間に、現在の個々の状況を離れて全体性を認識することを可能にする (SW II, 434, 323-4)。意志はこのようにして段階系列のそれぞれの階層において対立闘争を繰り返しながら、最低次の無機物から植物、動物、人間へ

と「ポテンツ」を上昇していく (SW II, 172ff.)。意志は無機物の段階においては単なる盲目的活動にすぎなかったが、植物、動物へとポテンツを上昇するにつれて意欲と知性の分離が次第に明瞭なものになっていき、最後の人間の段階において意志は完全な知性を獲得するに至る (SW IV, 173ff.)。ショーペンハウアーの上述の思想は言うまでもなく、自然から知性を産出的に導出しようとしたシェリング自然哲学の発想を受け継いだものだろう。

六

以上が、ショーペンハウアーが『意志と表象としての世界』の第一巻および第二巻でたどった行程である。彼は第一巻において、まず観念論的立場から表象界の構造を明らかにし、實在的客観と實在的世界 (全体表象) を主観の側から導出する。これに続く第二巻では、次に意志が主題的に取り扱われる。すでに見た通りこの意志は、考察の出発点においては身体の意欲と表象の紐帯を可能にするものとして要請されるにとどまったが、自然哲学の展開の中で徐々にその具体的な内実を獲得していくことになる。第二巻ではまず類推 (類比) 的考察を通して、意志が一切の自然現象を貫通しこれらに浸透していることが示される。さらにこの意志が自然の段階系列を成立させ、その階梯を上昇して最終的に人間の知性に到達するまでが叙述される。ショーペンハウアーは観念論において、まず主観的なものから客観的なものを導出する。これに対して自然哲学においては客観的なもの (自然) から主観的なもの (知性) が産出され、こうして観念論と自然哲学の両行程は円環構造を成して一つに連結する。ショーペンハウアーはこのようにして、シェリングが主張した精神と自然の円環を自らの著作の中で呈示したのである。

以上の観念論と自然哲学の対置を通して、ショーペンハウアーは最終的に表象界と意志界（自然界）を統合する物自体としての意志を浮かび上がらせようとする。すでに述べた通りこの意志は、一方の表象界においてまず全客観を担う身体的自我（「世界は私の表象である」の「私」）を成立させる。しかし他方で意志は自然の根底にある「根源的創造力（ursprüngliche Schöpferkraft）」（SW III, 372）でもあり、意志は諸々の個体において現象しながら自然の全体的秩序を産出的に構成していく。そしてこのように意志という同一の根源を持つ表象界と意志界の間には、精確な対応関係が成り立っている。すでに述べた通り、自我は自らの意識内で自身の身体における意欲と表象の一致を認識するが、他方でこの意欲と表象の一致は自然のうちにあるあらゆる個体において無限に反復されている。また表象界において実在的世界の構造は全体的な作用連関であることが示されたが、同様に自然界においても全体的な闘争関係が成立しており、表象界において分類された三種類の作用性の連関は自然の段階系列のそれぞれの階層に対応している。こうした対応関係を通じて、表象界と意志界とは実は同一の世界の二つの異なる側面に他ならないことが明らかになる。

……それ自体意志であるものが、他方では表象として存在する……。 (SW II, 166)

……我々が生きかつ存在するこの世界は、その全本質に従えばどこまでも意志〔意志としての世界〕であるが、同時にどこまでも表象〔表象としての世界〕である。……各人は自分自身がこの意志であることを見出すのであり、世界の内奥の本質はこの意志のうちにある。同様に各人は認識する主観としても自分自身を見出し、この主観の表象が全世界である。 (SW II, 193)

世界は一方では表象界として成立し、他方では意志界として存続している。そしてすぐ上で見た通りこれらの表象

界と意志界は円環構造を成して一つに連結し、観念論と自然哲学の二系列は、自我の成立根拠であり同時に自然の根源的創造力でもある意志の上に綜合される。こうして意志は観念論と自然哲学の對置を通じて、「意志と表象としての世界」の「形而上学的統一」(SW III, 367)を表すものとして世界の根底に措定されることになる。ショーペンハウアーが最終的に提示した以上の観念論と自然哲学の對置の全体構造は、絶対的同一性の上に超越論哲学と自然哲学を統合しようとしたシェリングのそれとほぼ同じものであると言える。ただし両者の思想は以下の点において異なっている。すなわちショーペンハウアーにおける観念論と自然哲学の對置は、様々な類推(類比)的考察を通して形而上学的統一としての意志を導出する思想に他ならない。前述した通りシェリングはかの絶対的同一性を、主・客の對立を脱した知的直観によつて直接とらえようとした。だがこれに対してショーペンハウアーにおける形而上学的統一としての意志は、精神と自然の關係等を通じてそれを類推的に認識することが許されるのみであり(SW III, 367)、この意志を直接的に把捉しようとする思考は彼においては退けられるのである。

七

ショーペンハウアーにおいては観念論と自然哲学は円環構造を成して連結し、両系列は形而上学的統一としての意の上綜合される。彼におけるこの對置の全体構造は、シェリングにおけるそれと酷似している。また本論文で見てきた通り我々はショーペンハウアーの對置思想の至る所にシェリング的な発想を認めることができるのであり、以上のことからショーペンハウアーにおける観念論と自然哲学の對置はシェリングのそれを受け継いだものであると推

定される。ただし、ショーペンハウアーが自然哲学を展開していくに当たっては常に独断論の回避が念頭に置かれて
いることを強調しておかなければならない。彼は哲学の端緒を観念論に置き、この観念論の成果に類推(類比)を重
ねていくことにより自然哲学を展開していく。このようにショーペンハウアーは観念論と自然哲学の対置を通じてど
こまでも類推知の立場にとどまることにより、自らの思想が独断論に陥ることを回避しようとしたのである。

注

以下のテキストに関しては、引用箇所および本論の論述に対応する箇所を本文中の()内に略号、巻数、頁数の順で示す。なお引用文中の「」内は引用者による補足である。

A.Schopenhauer: Sämtliche Werke, 4. Aufl., hg. v. A. Hübscher, F. A. Brockhaus, Mannheim, 1988. (Abk. SW)
F. W. J. v. Schelling: Schellings Werke, hg. v. M. Schröter, C. H. Beck, München, 1958. (Abk. SA)

(1) P. F. H. Lauxtermann: Schopenhauer's Broken World-View, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London, 2000.
鎌田康男・齋藤智志・高橋陽一郎・白木悦生訳著『ショーペンハウアー哲学の再構築』法政大学出版局、二〇〇〇年、二四八―五〇頁。

(2) なお、以下の文献の中でショーペンハウアーとシェリングの影響関係全体(ショーペンハウアーがいつ頃シェリングのどの著作を読んだのか等)の概観的説明がなされているのを参照のこと。A. Hübscher: Denker gegen den Strom, 2. Aufl., Bouvier, Bonn, 1982.

(3) Vgl. R. Salfarski: Schopenhauer und die wilden Jahre der Philosophie, C. Hanser, München, 1987, S. 319.

(4) ショーペンハウアーにおける表象経験の構造の詳細については、拙論「ショーペンハウアーにおける現時的表象の構造―全体表象・身体・純粋物質―」(関西大学哲学会編『哲学』第二十二号所収、二〇〇二年)を参照。

(5) 身体的自我をめぐるショーペンハウアーの議論の詳細については、拙論「ショーペンハウアーの根源的洞察―自我の統

一原理としての身体」(関西哲学会編『アルケー』第九号所収、二〇〇一年)、同「自我・像・身体―後期フイヒテとシヨールペンハウアー」(日本フイヒテ協会編『フイヒテ研究』第九号、二〇〇一年)を参照。

- (6) A. Schopenhauer: *Der handschriftliche Nachlass*, Bd. 3, hg. v. A. Hübscher, Waldemar Kramer, Frankfurt a. M., 1970, S. 195.
- (7) なお人間の段階に関してはシヨールペンハウアーは、作用性を成立させる根拠律(シヨールペンハウアーにおいては「生成の根拠律」と呼ばれる)の他に特に「行為の根拠律」という部門を設け、この行為の根拠律を人間の段階に対応させている。